

2016年度 一般社団法人日本社会福祉学会 学会賞受賞に寄せて

学会賞審査委員会による審査の結果、2016年度の学会賞が決定し、第64回秋季大会期間中の2016年9月10日に、佛教大学紫野キャンパスにおいて授賞式が行われました。奨励賞（単著部門）として、森口 弘美 会員（同志社大学）、蜂谷 俊隆 会員（美作大学）が選ばれました。

受賞された方々からの喜びの声をお届けします。



左から岩崎会長、蜂谷会員、森口会員、古川委員長、黒木副会長

◆ 奨励賞（単著部門） 森口 弘美（同志社大学）

**受賞作：『知的障害者の「親元からの自立」を実現する実践—エピソード記述で導き出す新しい枠組み—』
（ミネルヴァ書房、2015年9月30日刊）**

このたびの日本社会福祉学会奨励賞の受賞にあたり、選考に関わっていただいた先生方、これまでお世話になった方々にこの場をお借りして心から感謝申し上げます。賞に選んでいただいた拙著『知的障害者の「親元からの自立」を実現する実践—エピソード記述で導き出す新しい枠組み』は、私が身体障害者通所授産施設に勤務していたときにもった「障害者の家族（親）はそこまでしなければいけないのか？」という素朴な疑問に端を発しています。大学院に社会人入学してから、その疑問が研究といえるような形を成すまでの間には、修士課程でご指導いただいた岡本民夫先生、博士課程でお世話になった木原活信先生をはじめ、学内外の多くの先生方や先輩方、同期生や後輩からも貴重なご指導やご助言をいただきました。また直接的な指導・助言のみならず、同志社大学という知的刺激に満ちた研究環境に恵まれたことも得がたい幸運でした。

改めて振り返ってみれば、私のこれまでの研究の歩みは日本社会福祉学会にもおおいに支えられました。大学院生になって初めての口頭発表で、発表後に会場の学会員の方から声をかけていただいたことは大きな自信となりました。また、投稿論文に何度かチャレンジした際にいただいた査読報告書は、採否の如何に関わらず貴重な学びとなり、研究を進展させ

るための力と技術を与えてくださいました。さらに、このたびの賞の選考にあたって拙著を丁寧にご読んでいただき、評価や課題をお示しいただいたことは、今後この研究を発展させるための糧になると確信します。

受賞の連絡をいただいたのは、7月25日の夜のことでした。思いがけない吉報にまだ実感もわかないまま迎えた次の日の朝、相模原の障害者施設での殺傷事件のニュースが日本中を駆け巡りました。障害者福祉の研究に携わる者として何ができるのか、何をすべきかを厳しく問われていると感じ今日に至ります。自分のもてる力と時間を何に注いでいくかを見定め、今後も皆様の支えを得ながら少しずつ前進してまいりたいと思います。

◆ 奨励賞（単著部門） 蜂谷 俊隆（美作大学）

受賞作：『糸賀一雄の研究 人と思想をめぐって』 （関西学院大学出版会、2015年3月25日刊）

本書は、関西学院大学に提出した博士学位請求論文を、加筆修正して出版したものです。そして、骨格となる部分については、本学会の『社会福祉学』に掲載して頂いた論文をもとにしています。それぞれの論文の投稿に際しては、内容に対するご指摘を頂くとともに、次の研究へとつながる貴重な示唆やご助言を頂戴しました。

さらに、投稿論文のうち「昭和二〇年代における糸賀一雄のコロニー構想と知的障害観」につきましては、日本社会福祉学会第10回（2013年度）学会賞（奨励賞・論文部門）にも選んで頂きました。大変光栄に感じますとともに、本書の執筆にあたり大きな励みともなりました。そして、本書を出版することができましたのは、本学会とも関係の深い社会事業史学会より、第五回吉田久一奨励賞（刊行費助成）を頂いたおかげです。

本書の目的は、戦後を代表する福祉実践者である糸賀一雄氏の活動と思想について、彼の著作や関連する史料をもとに、これまであまり注目されてこなかった部分についても視野を広げて捉え直してみることにありました。ただ、私のような実践経験も乏しく、研究者としての経験も浅い者が、糸賀氏のように歴史的に大きな存在の人物史に挑戦することは、無謀であり、不遜なことではないかと思うことも度々ありました。それでも、糸賀氏自身の「(福祉の) 実現の過程でその思想は常に吟味される」(糸賀一雄『福祉の思想』(1968, 日本放送出版協会) 64頁) という言葉も支えにしながら取り組む中で、いくつかの新たな発見も得られ、半世紀以上前の活動や思想の中に新鮮さを感じられたように思います。結果として、歴史の中に未来への可能性を探ることが福祉における歴史研究の使命であると、あらためて確認することとなりました。

ご指摘頂きました通り、本書には多くの課題があることも自覚をしております。この受賞を励みに、益々精進して参りたいと思います。